

中国のほんの話 (39)

中国の食品安全問題



蔭山 達弥

日本の食品メーカーの賞味期限改竄問題に端を発して、食品の安全問題が改めて国民の関心事になっている。お隣の中国の食品も世界の食卓を脅かしている。中国からわが国へ輸出しているウナギの養殖業者の一部が、合成抗菌剤のマラカイト・グリーンを使用していることが判明したニュースをきっかけに、例の「段ボール肉まん事件」で、わが国の消費者は中国産の農産物や魚介の購入を一齐に手控え、風評被害で、横浜や神戸の中華レストランは軒並み客足が落ちたそうだ。

さて、中国でただ一人食品安全問題を追及している北京在住のジャーナリスト、周勅(しゅうけい)氏が2007年10月1日、自著の翻訳出版にあわせて来日した。「民以何食为天—中国食品安全現状調査」の邦訳版、『中国の危ない食品』は、草思社(¥1,470)から10月5日に出版された。周勅氏は1964年、西安生まれ。1989年の天安門事件に連座し、3年近く陝西省労働教育所という獄中にいた。パンフレットを配布して学生たちにデモに行くように扇動したというのが氏の罪状だった。現在は中国政府の管理を拒む作家たちが集まって作った独立ペンクラブに所属し、作家活動をしている。本書の巻末に、翻訳した廖建龍(りょうけんりゅう)氏とのインタビューが掲載されているが、その中で本書を書いた経緯について、こう述べている。「私はあるとき、親族やまわりの人たちの中で、癌(がん)にかかった人があまりにも多いことに気づいたんです。このことから、食品安全の問題に関心を抱き、これをテーマにして書こうと考えたのです。2002年後半から作業を始めました。…」周勅氏は天安門事件に連座しているため、記者の身分証を発給してもらえず、身の危険を覚悟するほどの危険な取材もしたという。本書は2004年度に受賞した『中国農民調査』に続いて、2006年に世界中のルポルタージュ文学作品から優秀作を選ぶドイツの「ユリシーズ国際ルポルタージュ文学賞」を受賞している。周勅氏は本書の日本語版への序文の中で、「…日本語版を出して、日本人々に中国政府や中国製品を敵視する感情を抱かせるためではありません。ましてや‘あとと野となれ山となれ’式の捨て鉢な気持ちで‘中国くたばれ’と叫ぶためでもありません。…」と言い、中国の食品汚染の真相を探り出し、それがもたらす結果と予防法を明らかにし、中国と世界に注意を喚起したかったからだと述べている。本書で明らかにされた食品汚染は深刻である。喘息治療薬で赤身化した豚肉、ホルモン剤を添加した養殖水産物による子供の早熟症、発癌性のある合成染料で鮮やかにされた卵の黄身、下水のゴミ油を加工した屋台の食用油や安いサラダ油、水銀がしみ込んだ農地…4年間にわたり、食品の安全問題を取材してきた著者による衝撃の報告である。

周勅氏と同じ年に生まれた日本人女性、谷崎光さんが北京大学に留学した時の体験をリアルに綴った『北京大學でなもんや留学記』(文芸春秋、2007)は、恐るべき中国の実情が描かれていて大いに参考になる。例えば、「ローカルの市場では病死した検印なしの牛の皮をはいで吊り下げていたりするから買ってはいけない」、「路地裏や路上の店は水を節約してほとんど食器も洗わず、油は廃油使用で、材料は劣悪なことが多いから食べるな」といった作者の友人(=中国人)の忠告は、絶対に間違いはない。この他にも「安いトイレペーパーを買ったらお尻が腫れた」、「ある日本の化粧品専門店をのぞいたら100%が偽物だった(この店はすぐにつぶれた)」など、本書「北京・暮らしの裏手帖」はこれから中国に留学を考えている人は絶対に読むべきである。最後に今回のテーマ、中国の食の安全とは直接関係がないが、著者が中国語学習で悟ったのは「語学に王道なし」、「急がば回れ」。著者が言うように初期の段階では一時期「毎日、朝から晩まで寝てもさめてもやる」「吐くほどやる」といった語学漬けの時期が必ず必要だ。詳しくは本書「さまよえる中国語学習者に捧ぐ」をご覧ください。

かげやま たつや(教授・中国文学)